

平成 26 年 5 月 14 日現在

機関番号：13301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652022

研究課題名(和文)チベットのボン教図像の文化史的考察

研究課題名(英文)A Cultural Study of the Iconography of the Bon religion in Tibet

研究代表者

森 雅秀(MORI, Masahide)

金沢大学・人間科学系・教授

研究者番号：90230078

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、チベットのボン教の図像にかんする本格的な研究を構築することを目的とする。そのために、基礎的な画像資料および文献資料の収集、情報データベースの構築、図像体系の解明を行った。最終的にボン教の図像学的研究という新たな学問領域を確立することをめざした。これらを通して、日本におけるチベット学や東洋美術史において、従来、見過ごされていたボン教美術に焦点を当て、その図像を中心とした研究を世界的なレベルに引き上げるようつとめた。

研究成果の概要(英文)：This project aims to make a full-scale research of the iconography of the Bon religion in Tibet. For this purpose, I exhaustively collected the iconographic materials of the Bon religion which include both images and literatures. I also constructed the database which provides this information on the internet, and I clarified the system of the iconography of the Bon religion. Finally I established a new academic field of the iconographic study of the Bon religion in Tibetan studies. Through these academic activities, I raised the standards of the iconographic study of the Bon religion which has been overlooked by the scholars in Oriental art studies as well as Tibetan studies in Japan so far.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 美学・美術史

キーワード：ボン教 図像学 画像データベース チベット美術 文化資源

1. 研究開始当初の背景

(1) わが国のチベット研究において、ボン教は「チベット土着の宗教」「シャーマニズム的な信仰」として位置づけられ、ほとんど研究の対象とされなかった。とくにボン教の美術に関する従来の研究は、研究代表者による基礎的な研究を除いてほとんどなされていない。一方、海外では、チベット文化に対する広い関心から、いくつかの重要な研究がある(D. Snellgrove, S. Karmay, P. Kvaerne など)。日本のチベット研究は、仏教、歴史、言語に関しては世界のトップレベルにあるが、美術研究を含めボン教研究については、海外の研究に大きく立ち遅れているのが現状である。

(2) 研究代表者はインド仏教、ヒンドゥー教、チベット仏教の美術作品と儀礼を中心にこれまで研究を進めてきた。その延長線上で、仏教と密接な関係を持ちつつも、独自の体系をそなえているボン教の画像や儀礼が、研究対象として浮上してきた。90年代後半には、ボン教の学際的な共同研究に参加し、その成果を発表した(Karmay & Nagano eds., *New Horizons in Bon Studies*, 2000)。その後、2007年9月には中国の四川省アバ地区において、ふたたびボン教の僧院の調査を行い、多数の画像資料を収集し、ボン教の画像学の総合的な研究を実施する態勢が整いつつあった。

(3) 研究代表者は、すでにボン教の美術に関するいくつかの研究成果を発表してきたが、これは世界的にも先駆的な業績で、わが国においてはほとんど唯一のこの分野の業績である。ボン教に関する研究はチベット学のみならずアジア研究のさまざまな分野からも強く求められているが、わが国では専門として従事する研究者がほとんどいない。美術作品を中心とした基礎的なデータの収集とその内容の解明が、ボン教の基礎的な研究として必要であるとともに、アジアの美術史の重要な研究領域の創出につながることを期待された。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、本格的なボン教の画像学的研究を構築することを目的とする。そのために、基礎的な画像資料および文献資料の収集、情報データベースの構築、画像体系の解明を行い、最終的にボン教の画像学的研究という新たな学問領域を確立する。チベット文化圏において現地調査を実施し、資料の収集につとめ、調査終了後はその資料をもとにデータベースを構築し、それをふまえた研究を進める。

(2) 画像に関連する儀礼、習俗、文化も視野に入れ、画像を中心とする文化構造を明らかにする。画像を単なるイメージとして扱うのではなく、その背後にある信仰、文化、習俗

などの総体が出したものと見なす。とくに、仏教との対比において、仏教と異宗教とのあいだに見られる影響関係の典型として、他の地域、たとえば日本における神道、中国における道教などと仏教がどのような関係を持ったかを照射することが可能となる。これも、従来のボン教研究に欠落していた視点である。

(3) これらを通して、日本におけるチベット学や東洋美術史において、従来、見過ごされていたボン教美術に焦点を当て、その画像を中心とした研究を世界的なレベルに引き上げることを目的とする。そして、チベットの宗教研究を、仏教への一極集中から、文化現象全般を視野に入れたバランスのとれた研究へと転換することをめざす。

3. 研究の方法

(1) ボン教画像資料の蒐集

ボン教の画像資料を、現地調査によって収集する。調査地域は中国国内の主要なボン教寺院と博物館・美術館等である。さらに、日本国内のさまざまな研究期間で保存されているボン教に関する画像データも網羅的に収集する。具体的には、鶴見大学図書館所蔵の逸見梅栄画像コレクション、高野山大学所蔵のチベット仏教研究会撮影データ、その他、個人の研究者が過去に撮影した画像データなどがあげられる。

(2) ボン教画像資料のデータベースの構築

現地調査において収集した画像資料を整理し、画像データベースを構築する。インターネット上にボン教の画像資料に関するデータベースを構築し、公開する。これと平行して、チベット語によるボン教の文献資料から抽出した画像に関するテキスト・データについてもデータベース化し、画像資料と文献データを連携させる。この作業を通じて、ボン教の画像データを中心とした情報プラットフォームを、インターネット上で公開し、国内外のチベット研究者の利用に供する。

(3) 画像体系の解明

収集したデータをもとにボン教の画像体系の解明を行う。画像資料と文献資料から抽出した情報に、現地におけるインフォーマントからの聞き取りなどの成果を統合して、主要な画像の解明を進める。このときに、画像の体系を単にイメージの集積ととらえるのではなく、ボン教の教理、実践、儀礼などと密接に結びついていることに配慮し、その総体の表出としてとらえる。また、画像作品の製作年代について、仏教美術の編年を参考に分析し、ボン教美術の様式史を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 中国国内のボン教寺院、とくに青海省同

仁県レブゴン地区と、四川省アバ地区でおこなった現地調査によって、ボン教の画像データを網羅的に収集し、その分析を行った。また、北京市内の故宮博物館、雍和宮、承德市内の外八廟の諸寺院、避暑山荘博物館においても、チベット仏教の図像資料とともに、ボン教に関連する作品の調査をおこなった。

(2) 日本国内においては、横浜市鶴見区の鶴見大学図書館が所蔵する逸見梅栄氏撮影の戦前の満洲におけるチベット関連資料について、集中的に研究を行った。当時のガラス乾板の資料について、デジタル・カメラによる撮影、被写体の特定、既発表の文献との照合などの作業を進めた。この他に、高野山大学が所蔵する高野山大学チベット文化研究会の写真資料についても、フィルム・データのデジタル化、内容の確認をおこなった。

(3) これらの調査データをもとにデータベースを構築し、公開を進めた。研究代表者が主催するアジア図像集成研究会 (Institute for the Asian Iconographic Resources) のホームページ上で、中国国内で撮影した写真資料のうち、とくに重要と考えられる作品については、地域および寺院ごとに分類し、閲覧できるシステムを構築した。また、鶴見大学図書館所蔵の逸見梅栄画像データに関しては、学術資源情報リポジトリ協議会の全面的な支援を受け、同協議会のホームページ上に、詳細な画像データと、関連するメタデータを掲載した。

(4) 鶴見大学図書館所蔵の逸見梅栄画像データについては、その歴史的意義をふまえ、紙媒体の刊行物での公開もおこなうべきと考え、アジア図像集成研究会から刊行されている Asian Iconographic Resources Monograph Series の一部として、全5巻で上梓した。各巻が300ページ余りで、全体でおよそ1500点の画像データが、鮮明な形で公開された。チベット美術研究のみならず、戦前、わが国で行われたアジア研究の再評価にもつながる貴重なデータである。

(5) 以上のような研究をふまえ、ボン教の図像について、以下のような知見を得た。

チベットのボン教図像の全体を眺めた場合、仏教と同様、ボン教にも視覚化され、造形化される聖なるイメージがあることが明らかになった。ただし、ボン教がこのような図像作品を有するようになったのは、現在のボン教に直接つながる「組織化されたボン教」の時代になってからと推測される。それ以前のボン教徒たちは、特定の神々への信仰は有していても、おそらくそれを視覚化することはなかったと考えられている。

ボン教のパンテオンの全体的な構造は、寂靜尊・忿怒尊という二つのカテゴリーが基本にある。これは仏教のニンマ派などにも見ら

れるが、それぞれのカテゴリーの内部は、仏教とボン教徒のあいだで一致を見ない。とくに、グループを構成する神々を見た場合、仏教では同一のヒエラルキーに属する均質なメンバーで構成されるのに対し、ボン教では「四至上尊」や「一二儀軌」の神々のように、イメージや性別の差異を越えて、まとまりをもつ。ボン教のパンテオンに厳密な意味でのヒエラルキーそのものがあるかどうかも疑問である。

神々の具体的なイメージと名称を見ると、仏教の影響は誰の目にも明らかである。しかし、ボン教徒はこの両者をひとつの神に同時に適用することは、注意深く避けている。いずれか一方をボン教独自のものにしたがり、別々の仏教の尊格からそれぞれを借用するという「ずらし」によって、独自のアイデンティティを維持しようとしたと推測される。

ツォクシンや仏伝図(ボン教では「シェン」伝図)のように、仏教の図像形式がそのままボン教の図像にも認められることもある。また、祖師の血脈を描くことや、法身のような根源的な神格をタンカの画面の上部に描くなど、画面構成の原理も共通する点も多い。これらは、実際に作品の制作にあたったものが、おそらく仏教図像とボン教図像の両者を扱ったことにも関連するであろう。また、ツォクシンのように、特定の宗教実践と結びついた形式の場合、ボン教と仏教とのあいだの実践方法の共通性も視野に入れなければならない。

(6) これらの研究の成果は個別の論文や図書として発表したほか、龍谷ミュージアムで2014年4月から開催された特別展「チベットの仏教世界：もうひとつの大谷探検隊」でも有効に活用された。この展覧会に関連して開催された記念講演会「チベット仏教美術の魅力」において、研究成果の一部も紹介し、一般の人々の啓蒙にも寄与した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

Mori, Masahide, The Iconography of Cruel Beauties in Indian Mythology. In. *Foundations of Cultural Resource Studies: A Reader*. Eds. by H. Kagami and Y. Yoshida. Kanazawa: Center for Cultural Resource Studies, Kanazawa University, 2014, pp. 79-90. 査読あり

〔学会発表〕(計 2件)

森雅秀「チベット密教美術の魅力」龍谷ミュージアム特別展「チベットの仏教世界：もうひとつの大谷探検隊」記念講演会、2014

年4月27日、龍谷大学大宮学舎。

森雅秀「インド文化における身体」スポーツ人類学会 2013 年度学術大会 招待講演
2013年3月24日、金沢大学サテライトプラザ。

〔図書〕(計 8 件)

入澤崇、森雅秀、能仁正顕、三谷真澄、高本康子、岩田朋子他『チベットの仏教世界：もうひとつの大谷探検隊』2014年、pp. 22-60、100-116、145-152。

森雅秀『鶴見大学図書館所蔵 逸見梅栄コレクション画像資料5』Asian Iconographic Resources Monograph Series, No. 9, 2014年、338pp.

森雅秀『鶴見大学図書館所蔵 逸見梅栄コレクション画像資料4』Asian Iconographic Resources Monograph Series, No. 8, 2014年、338pp.

森雅秀『鶴見大学図書館所蔵 逸見梅栄コレクション画像資料3』Asian Iconographic Resources Monograph Series, No. 7, 2014年、332pp.

森雅秀『鶴見大学図書館所蔵 逸見梅栄コレクション画像資料2』Asian Iconographic Resources Monograph Series, No. 6, 2013年、324pp.

森雅秀『鶴見大学図書館所蔵 逸見梅栄コレクション画像資料1』Asian Iconographic Resources Monograph Series, No. 5, 2013年、318pp.

細見博志、森雅秀、島菌進、竹村牧男、波平美枝子、青野透他『死から生を考える：新「死生学入門」』北國新聞社 2013年、pp. 85-120。

津田徹英、森雅秀、定金計次、内田啓一、田中公明、泉武夫他『仏教美術論集 2 図像学Ⅰ：イメージの成立と伝承(密教・垂迹)』(仏教美術論集 2)編、竹林舎 2012年、pp. 68-82。

〔その他〕

ホームページ等

学術資源リポジトリ協議会

<http://amane-project.jp/hibunken/>

アジア図像集成研究会

<http://air.w3.kanazawa-u.ac.jp>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森 雅秀 (MORI, Masahide)

金沢大学・人間社会研究域人間科学系・教授

研究者番号：90230078

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：